

# 第 39 回山崎記念農業賞

受賞者：新潟県上越市 手づくり百人協同組合

2015年7月25日

山崎農業研究所

目 次

I. 表彰理由	1
II. 表彰状・記念品	5

## I. 表彰理由

選考委員：塩谷哲夫

### 山崎記念農業賞 推薦文

#### 手づくり百人協同組合

対象者（組織）：手づくり百人協同組合

所在地：新潟県上越市安塚区樽田

活動内容：豪雪地帯の山間農村で、家族農業を支えるかあちゃんの自主組織による  
手づくり物産の直売所運営

#### 〔推薦理由〕

##### 1. 手づくり百人協同組合・雪だるま物産館の設立の経緯

名高い豪雪地である新潟県上越市安塚区（旧安塚町）。長野との県境、菱ヶ岳（1,129m）山麓の棚田地帯に、農家のかあちゃんたちの農産物や手づくり品などの物産を商う「雪だるま物産館」がある。それを運営するのは農家のかあちゃん（60～70代だから「ばあちゃん」と言ったほうがいいかもしれない）たちの事業協同組合（法人）「手づくり百人協同組合」である。

旧安塚町は1987年（昭和62年）に「さよなら後樂園」フェスティバルに45トンもの雪を運び込んで、都会の人々に雪遊びの楽しみを体験させたとんでもない町である。その勢いで、安塚町（矢野学町長）は、平成2年には「キューピットバレイ」スキー場を、平成4年には「雪だるま温泉」を開設し、NEDOの融資を受けて雪中貯蔵施設（建造物の冷房も行う）を設営するなど、嫌われ者であった雪を逆手にとって、雪を人々の暮らしを豊かにしてくれる「友だち」だとして売り出した。「過疎」とは“可能性のある広がり”と安らぎ”であり、「山村」は“全町が緑の公園”だということだと唱えた。

安塚町は、豪雪・不況で離村者の続出する状況に屈することなく、人々に勇気と誇りを自覚させ、各集落（25ヵ所）毎の特産（物産だけでなく伝統行事なども）を振興・再興させる町づくりを展開した。その一環として、平成7年に「女性100人委員会」を設立し、かあちゃんの作る物産を直売する「雪だるま物産館」を設けた。とうちゃんの棚田での米作収入だけに生計をたよるのではなく、かあちゃんの稼ぎを加えた「共働き」で「農家」の生活を支えるようにと言う呼びかけであった。嫁に来てはじめて、かあちゃん名義の口座が開かれた。今頃になって、「女性の社会進出を進めよう」なんて言うから騒ぎが聞こえてくるが、それよりもずっと早く、「母ちゃんの財布をふくらませる」という中身のある取組

であった。

平成 17 年、安塚町が上越市に合併するにあたって、施設は上越市所有となったが、管理運営は、自治体から独立した事業協同組合「手づくり百人協同組合」が行うことになった。農家のかあちゃんたちは、一口 1 万円を出資した。

## 2. 「雪だるま物産館」の経営状況

現在の「雪だるま物産館」の経営状況を「手づくり百人協同組合」の平成 26 年事業報告書により確認する。

### ① 組合員の取り扱う農産物、農産加工品等の共同販売事業

取扱い件数は 91,653、販売総額 25,290,285 円であった(件数、販売額ともに前年比 98%)。

取扱商品は極めて多様であり、バーコードによる商品の分類口数は 300 にも及んでいる。販売額の一番多いのは「菓子類」(かき餅等)の 8,221,974 円で、総売り上げの 32.5%もある。次いで、特産品としてインターネットや電話での注文も入ってくる評判の良い山菜類(9.3%)、葉茎菜類(4.3%)、乾物・干し物(干しぜんまい、ずいき等)であった。〈別添資料参照〉

なお、員外利用は、5618 件、2,607,809 円であった。

### ② 組合自身の運営上、仕入れ・販売したもの

運賃、資材他関連商品(米等)は 49,216 件で 76,433,997 円。米卸売が 2,403,072 円。

喫茶コーナーでの、ジェラート、おにぎり、おやき、コーヒー等が、16258 件、5,176,355 円。上越市からの公衆トイレ、雪中貯蔵施設管理業務が 705,793 円。

### ③ 損益計算書

人件費(給与・役員報酬・賞与に 928 万円)、業務費(1640 万円)を含む一般管理費が約 2 千 7 百万円を支払って、当期純利益金額は 5,547,628 円であった。

物産館の建物、諸施設・機械などが上越市の所有であるために、直接経費のみの計算で住むという恵まれた条件もあって、現在は、何とか順調な運営が図られているようである。

(増野夫妻の給与も支払われている。)

### ④ 今後の問題

組合員の高齢化が進行する情勢は避けられない。それに伴って組合員の物産の出荷量並びに消費需要の漸減が懸念される。また、物産館の客数の動向も、地域社会の趨勢(高齢化、人口減少)、キューピットバレイや雪だるま温泉の盛衰などの影響をまともに受けることになる。それらの影響を克服して、持続的に安定した物産館の運営(経営)ができるかどうか、政府の農業・地域政策や県・上越市の行政施策の影響を受けることはもちろんであるが、具体的な現れ方としては、組合の取り組み方針が問われることになる。

増野理事長、増野事務局長、そして組合員の佐藤久子さん(70 歳。販売額：山菜部門 3 位、豆類 1 位。総合売上約 55 万円)、春谷雪枝さん(70 歳。販売額：菓子・パン部門 3 位。総合売上約 280 万円・1 位)とのインタビューの中でも、心配と同時に、展望を開く可能性

を示唆するヒントも話し合われた。

(益永八尋、塩谷哲夫両幹事の現地報告を参照されたい。)

### 3. 山崎記念農業賞にふさわしいかどうかについて

① 最も評価できるのは、「雪だるま物産館」を運営する「手づくり百人協同組合」が、自治体やJAの管理下にはない、“農家のかあちゃんたち”の自主独立の組織であることである。淡々と山村に生きる人々の、地域の自然環境を活かしながら、静かな誇りを伴った“しぶとさ”を感じる。何者にも、ここの人々の農的なくらしを壊すことができないだろう。

そこに山崎農業研究所の農業観並びに組織理念と通底するものがあるのではないかと思う。

② 「雪だるま物産館」を通じて、かあちゃんが自らの生産物をお金に換え、自分の自由になる財布・預金口座を持つことは、女性としての自立を自覚させ、「農家」の主婦としての存在を自覚し、また、それを家族に、地域社会に、認めさせることになった。「農業」は家族農業によって形成される。「農家」は家族によって支えられるものである。これは山崎農業研究所の「農家」・「家族」・「女性」観と共通しているのではないかと思う。

③増田寛也らの「地方消滅」論に抗して。

益永・塩谷が現地調査で訪問して体感した安塚は、表面的には“動かざること岩盤の如し”であった。安倍政権の言う「強い農業」とは最も縁遠く、また上越市への「吸収合併」があって、かつてのような自主独立安塚のような派手な“動き”は鳴りを潜めていた。

しかし、緑に囲まれた中で営々として棚田を耕し、山菜を採り、かき餅や乾物や漬物に加工し...と、“動かないこと”が究極の地方である山里の人々の暮らしを持続させてきたのではないかと思った。ただし、そこには派手な動きはないが、旧来のシステムのほころびを補強してシステム本体を持続させる行き方、深層での“動き”があることもわかった。

たとえば、都会出身の若い増野夫妻が村に移住してきて20年。今では農家の暮らしの要となっている。これは明らかに旧来のシステムの崩壊を防ぐ大事な突かい棒ではないのか。実は、塩谷の大学の卒業生たちが、この辺りの中山間地帯に就農・定住し、消防団長になったりして、村の人々とともに楽しく暮らしている。平場のコメづくりが離農した人の棚田の面倒をみに出張ってくる。ここには下から上を支える営農集団作りのヒントがある。

インタビューした佐藤さんの息子は上越市街からかあちゃんの山菜採りの手伝いにやってくるという。村の子供たちの多くが上越地方圏内で生活していて、機会を見ては車で駆けつけてきて、とうちゃん、かあちゃんの仕事を手伝ってくれているらしい。通勤農業が成立するかもしれない。営農集団ができればIターンもあり得るかもしれない。坊金・樽田・和田にはすでに「集落営農」の動きがある。

商品でも、米での出荷とかき餅販売〈春谷さんの例〉、山菜の生と乾物、野菜の青果と漬物等の価格、投入労働を比較して、保存食への加工・商品化による6次産業化の成果は明白。

いまは、「百人協同組合」が「雪だるま物産館」を足掛かりにして、かあちゃんの財布を

ふくらまして、しぶとく「家族農業」、山里の暮らしを持していくように頑張っていてほしいと思った。「手づくり百人協同組合・雪だるま物産館」の活動を深読み、先読みして、山崎記念農業賞に推薦する。

- 【参考】○組合員の声ー「地元で、販売できる施設があるのは、ありがたい」。「ここに出荷することが生きがい、楽しみ」。「ここに来れば、みんなにあえて、楽しい」。
- お客さんの声ー平成 18 年アンケート調査結果：10 代～70 代の男女 116 名の甘から辛口までの評価（別添資料）。

*（別添資料の添付は省略：編集者）*

## II. 表彰状・記念品

山崎記念農業賞の表彰状および記念品は写真1、写真2のとおりである。

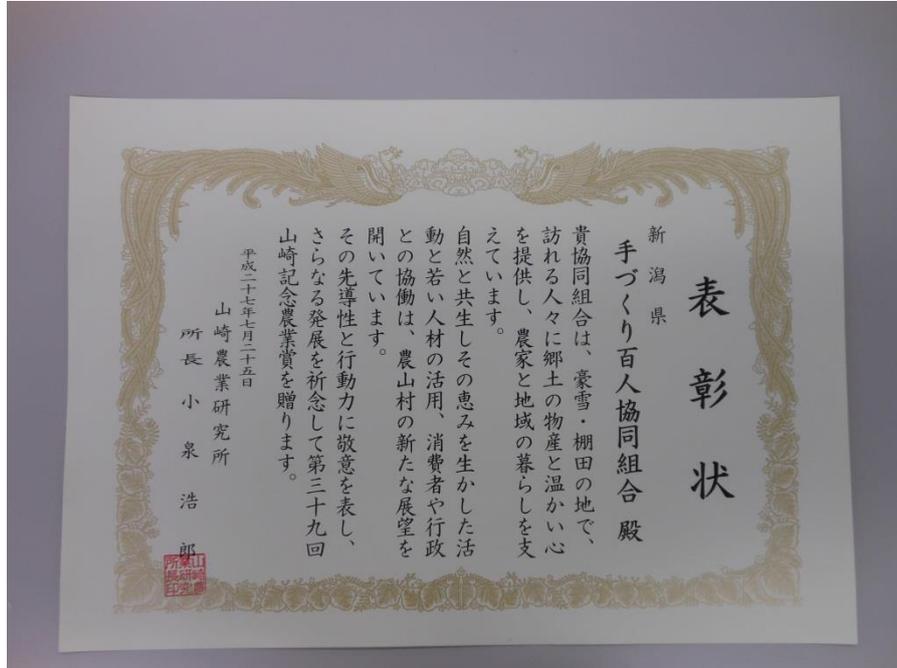


写真1 表彰状



写真2 記念品（楯）